

子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈4〉

— 平成19年度実施プログラム —

若杉 雅夫・三羽佐和子・伊藤 功子・長谷部和子
篠田 美里・杉山喜美恵・生嶋亜樹子（幼児教育）

I 実践の概要

児童教育学科幼児教育専攻では、平成16年度より親と子と学生とが遊びをとおして共に育つことをめざして、「地域との共生」をテーマに、「子育て支援」と「学生の心の育成」を理念とした子育て支援プログラム「あそびの森」における実践に取り組んできた。平成19年度で4年目となる、毎月の「あそびの森」のプログラムでは、地域の子どもと保護者を対象に各ゼミナールの専門性を生かしたプログラムを学生主体で企画・運営している。本年度は、実践を継続していくにあたって、年度当初に専攻スタッフ全員で「あそびの森」におけるこれまでの実践やゼミでの活動を整理し、子育て支援という枠組みの中にどう位置づけていくかを検討する場をもった。その結果、本学で取り組んできた「あそびの森」での活動を、ゼミ単位の活動や学生の課外活動も含めてより幅広く捉え、今後ますます多様化してゆくことが予想される地域のニーズに応える必要があるという共通の認識をもつに至った。

本年度の実践は、特に以下の2点の特徴をもつ。第1に、地域の子育てセンターや児童センターと「あそびの森」との協力・協働企画がますます充実してきた点である。本学の「あそびの森」には、地域より毎週4～5人が見学に訪れており、これらの機会を契機として協力・協働体制が拡充してきている。第2に、これまで継続的に行ってきた学外の園へ出向いてのペーパーストーリー上演を、「あそびの森」の活動として積極的に位置づけ、本実践記録の考察の対象とした点である。上記の2点の実践の改善によって、教員や学生の子育て支援に関する認識が向上し、プログラム全体の質の向上が実現したと考えられる。

1 「あそびの森」の運営

平成19年度「あそびの森」の運営委員は、三羽佐和子・生嶋亜樹子が担当し、プログラムの作成、近隣の幼稚園・保育園、前年度までの参加者への案内文書の配布、申し込みに対する人数調整や、問い合わせへの対応などには、専攻教員全員で取り組んだ。「あそびの森」の月例プログラムは、前期プログラム5回・後期プログラム5回の全10回であり、各プログラムの運営と当日の実務は、担当教員とゼミの学生が行った。また、各回2名の教員が、当日の実務の補助を担当した。さらに、前期・後期プログラムでの経験と実績を生かしたゼミにおける活動を、「その他のプログラム」として幅広く展開した。

2 「あそびの森」の活動

(1) 前期プログラム（5月～9月）

プログラムNo.① 5月26日

活動名 「新聞紙で遊ぼう」

担当者 若杉雅夫

プログラムNo.② 6月30日

活動名 「音で遊ぼう」

担当者 篠田美里

プログラムNo.③ 7月7日

活動名 「七夕飾りを作ろう／子育て懇話会」

担当者 杉山喜美恵・生嶋亜樹子（七夕）

三羽佐和子他（懇話会）

プログラムNo.④

活動名 「親子であそぼう できるかなあ？」

担当者 伊藤功子

プログラムNo.⑤

活動名 「べたべた、トントン、いい気持ち
絵の具で遊ぼう」

担当者 三羽佐和子

(2) 後期プログラム（10月～2月）

プログラム No.⑥

活動名 「くまのプーさんを作って遊ぼう」

担当者 長谷部和子

プログラムNo.⑦

活動名 「わらべうた遊びやゲームをして
楽しもう」

担当者 三羽佐和子

プログラムNo.⑧

活動名 「クリスマス会」

担当者 杉山喜美恵・生嶋亜樹子

プログラム No. ⑨

活動名 「粘土あそびのクッキー作り」

担当者 若杉雅夫

プログラムNo.⑩

活動名 「みんなで歌ったり踊ったりしよう
／子育て懇話会」

担当者 篠田美里(歌ったり踊ったりしよう)
三羽佐和子他(懇話会)

(3) その他のプログラム

その他のプログラム①

活動名 「岐阜東・大洞幼稚園交流」

担当者 若杉雅夫

その他のプログラム②

活動名 「あそびの森で遊びましょ」

担当者 若杉雅夫 三羽佐和子 篠田美里

その他のプログラム③

活動名 「ペープサートを観る会」

担当者 若杉雅夫 篠田美里

その他のプログラム④

活動名 「児童センターとの連携プログラム」

担当者 杉山喜美恵 生嶋亜樹子

その他のプログラム⑤

活動名 「子育てサークルとの連携プログラム」

担当者 杉山喜美恵 生嶋亜樹子

その他のプログラム⑥

活動名 「おねえさんといっしょにあそぼう」

担当者 杉山喜美恵

その他のプログラム⑦

活動名 「児童センタープログラムへの参加」

担当者 杉山喜美恵

II 活動報告

1 前期プログラム (5月～9月)

プログラムNo.①

活動名 「新聞紙で遊ぼう」

実施日・会場

平成19年5月26日(土) 保育実習室

午前の部 10:00～12:00

午後の部 13:30～15:15

ねらい

- ・思いっきり気持ちを発散する。
- ・腕や指先などの身体機能を高める。
- ・自由な活動で、親と子の気持ちを和らげ、ともに遊ぶ楽しさを体感する。
- ・想像力を刺激し、感受性を高める。

担当者 若杉雅夫

参加人数 117名 参加家族 44組

(保護者 49名うち父親 5名／子ども 68名)

参加スタッフ 教員 3名／学生 18名

内容

活動の導入は、先ず学生の手遊びで子供の視線を惹きつけてから遊びの内容について実演を交えて説明した。

新聞紙は一人につき朝刊一部を配布し、活動が活発かつ円滑に展開するように状況に応じて補充した。新聞破りの活動に入った参加者は日常のストレスを思いっきり発散するかの如く、保護者も子どもも自由闊達に遊びを楽しんだ。破って気持ちを発散させた後は、後片付けも兼ねて部屋一杯に散らばった新聞紙をスーパーのポリ袋に詰め、お手製ボールを作った。新聞紙のボールで、参加者全員がドッチボールやサッカー、ボール回しゲームを楽しみ、お互い心を通わせて遊びを終えた。

総括および考察

プログラムの内容は、新聞破り→ボール遊び→破った紙片から連想しての表現活動と、三段階で遊びを展開する計画になっている。前回(平成17年度)は、この内容に沿って実施した。遊びの支援の練習においても、前述の内容に沿って学生は支援方法を一通り学習した。

しかし、今回は低い年齢の子どもの参加が多いため、遊びの状況に応じて内容に柔軟性を持

たせることを留意点とした。実際、当日の活動はボール遊びの段階でプログラムを終え、表現活動までには至らなかった。原因としては、時間に少々余裕がなかったという点も挙げられるが、一番の要因は、ボール遊びに和気あいあいと興じる参加者の姿を見て、現在の遊びを打ち切り、表現活動に移行する必要性を感じなかったことにある。プログラムの計画にとらわれることなく、参加者の心を読み取りながら状況に応じて、遊びの展開に柔軟性を持たせることの重要性をここで学んだ。今後この実践例を元に、活動過程での親と子並びに参加者相互の関係を学生と共に考察し、適切な援助・実施内容のあり方を探求し、更に支援能力を高める必要を感じた。

学生の支援も積極的に親子に関わろうとする姿勢が随所に見受けられ、授業での取り組みの成果が根付きつつあると感じた。



図1 新聞紙を破って気持ちを発散

プログラムNo.②

活動名「音で遊ぼう」

実施日・会場

平成19年6月30日(土) 保育実習室

午前の部 10:00~12:00

午後の部 13:30~15:15

ねらい

- ・ 日常の生活で使用している物の廃材を使って作ったおもちゃの音を楽しむ。
- ・ 歌にあわせて踊る表現を通して親子がスキンシップを楽しみ、気持ちを開放する。
- ・ 大型絵本を読み聞かせごっこ遊びを楽しむ。

担当者 篠田美里

参加人数 173名 参加家族 52組

(保護者 64名/子ども 81名)

参加スタッフ 教員 4名/学生 24名

内容

プログラム

1 手遊び 「ミックスジュース」

2 どんなおとがきこえるかな?

・ ぱしゃぱしゃいけとかえる

・ ぶーぶーぶえ

・ かばくんぱくり

・ おやかではぶらし

・ 棒でチャレンジ

・ カラフルマラカス

みんなでおもちゃのチャチャチャ

3 大型絵本 「おおきなかぶ」

4 みーちゃんのおはなし

・ おむすびころりん

総括および考察

この活動は、担当教員が提示したテーマ“音探検”を、2年生が内容(遊び)を出し合い、プログラムを構成し、当日の進行を担当したものである。今回は日常使用している生活用品を使って、面白い音を楽しめるよう工夫した。学生はグループに分かれ、教員の提示に自分たちの工夫を加え、遊びを創作していった。過程において、お互いのグループの進行を見比べながらより子どもが興味を示してくれる形を求めていった。材料の調達に関しては、自分たちだけでは追いつかないため、クラスの仲間呼びかけた。この様に見通しを立てて進めていかなければならない活動は、元来学生にとって不可欠で日常行われてきたことだが、現在のアルバイトと両立で自由時間をほとんど持たない学生にとっては、大変面倒であり、苦手な部分である。しかし、実際、「6/30に子どもと遊ぶ」という目標が出来るとはかどっていく。これも実践活動の良い効果である。今回、「ぱしゃぱしゃいけ」では、卵パックの角が布を突き抜けて危険ではないかという想定が出され、角を切り落とすという作業も加えられた。もう一つ「実際の楽器もさりげなく入れ込もう」と提案があり、実行された。子どもが様々な音体験の中から美しい

音を探していく活動や、生活用品から思いがけない音を楽しむ活動は子どもも学生も楽しむことが出来る機会となった。(図2)

絵本からのごっこ遊びは、学生の表現につられて子どもたちが作品の中に入り込みとても楽しそうであった。読み進むに従ってどんだんごっこに参加する子どもが増え、作品を理解し楽しんでいる様子を間近にした。学生の心も弾み、子どもと、保護者と学生が楽しい時間を共有できた。「みーちゃんのおはなし」では、三羽教授が「おむすびころりん」(図3)を手遊び入りで語られた。お話が始まると、吸い込まれるように子どもが集中する姿を目の当たりにし、学生は手本となる形を子どもと共に学べる貴重な機会に出会えた。



図2 シャラ〜〜ン きれいな音!



図3 おおきなおにぎりつくりましょ!

プログラムNo.③

活動名 子ども:「七夕飾りを作ろう」

保護者:「子育て懇話会」

実施日・会場

平成19年7月7日(土) 保育実習室

午前の部 10:15~11:30

午後の部 13:40~15:15

ねらい

- ・親と離れた時間を安全に楽しく過ごす
- ・日本の伝統的な行事に興味を持つ

担当者 杉山 喜美恵 生嶋 亜樹子

参加人数 147名 参加家族 38組

(保護者44名/子ども103名)

参加スタッフ

教員(あそび3名/懇話会5名)/学生33名

内容

- 1 はじめのあいさつ
- 2 パネルシアター(たなばたのおくりもの)
- 3 たなばた飾り作り
(星、おりひめ・ひこぼし、ちょうちん、つながり星、ひし形かいたん、天の川、貝つながり)
- 4 たなばたのうた
- 5 おわりのあいさつ

今回はたなばたという行事を楽しむというねらいもあったため、懇話会の前後に親子で楽しむ時間を設けた。前にはたなばたに関連したパネルシアターを、後にはたなばたの歌を歌った。また、分離時の親の不安を軽減するため、懇話会の間、子どもたちがどのようなことを行うのかをしっかりと説明した。

前年度、2歳以下の子どもには子ども一人に対し担当学生を決めるという担当制としたことで、さまざまな子どものニーズに対応することができたことをふまえ、今年度はすべての子どもに対し担当制とした(比較的年齢の高い兄弟姉妹に対しては一家族、学生一人の場合もある)。したがって、受け入れ時に担当学生がつくようにし、分離の時期まで親子と一緒に過ごす緩衝時間を作った。

パネルシアター終了後、親は隣の教室へ移動し、懇話会を行い、子どもたちは、たなばた飾りを作った。前年度のクリスマス会では子どもの発達段階をふまえ、年齢別グループでそれぞれ異なった飾りを作ったが、他年齢の飾りも作りたいという声や、遅速に対応するためもあり、今年度は複数のコーナーを準備した。

懇話会のために親子分離を強制的に行うのではなく、母親を求める子については、母親の傍で過ごすこととした。また、前年度の反省をふまえ、0・1歳児は、「おねむさんのお部屋」で託児を行った。

反省および考察

懇話会という形式は、平成17年度より導入され今年で3年目を迎えることもあり、指導者側にどのようなことが起こるかという予測ができていた。そのため、学生に対し、託児の配慮点、注意点についての指導が的確になされ、おおむね問題なく終えることができた。

飾り作りについては、多種類作る子、早く作る子、じっくり作る子などさまざまな子どもがみられた。数種類のコーナーを準備しておいたため、一人一人の活動のペースに合わせてめいっぱい時間を使うことができた。飾りの選択にあたっては、作り方の簡単なものから少し難しいものまで段階的になるよう配慮したことにより子どもの年齢幅にも対応できた。

また、担当制にしたことにより、飾りをたくさん作るより他のあそびを望む子に対しても安全性を損なうことなく、対応できた。このように子ども一人一人に学生をつけられることが、あそびの森のメリットでもあり、安心して懇話会に参加できるとの意見を保護者からいただいた。

各コーナーには作り方の用紙を準備しておいたので、終了後、たくさんの保護者が持って帰られ、この場だけでなく、家庭での生活につなげていくことができたのではないかと思う。



図4 飾り作りの活動の様子

プログラムNo.④

活動名「親子であそぼう できるかなあ？」

実施日・会場

平成19年8月25日(土) 保育実習室

午前の部10:00~12:00

午後の部13:30~15:15

ねらい

- ・家庭で楽しめる親子体操でスキンシップをはかる。
- ・運動の基本の一つである「跳」を中心に挑戦する意欲や活発な行動を身につける。

担当者 伊藤功子

参加人数 111名 参加家族40組

(保護者46名うち父6名祖母1名、子ども65名)

参加スタッフ 教員5名/学生19名

内容

1. 手あそび
2. ディズニー体操
3. 親子でできるかなあ
4. 跳んであそぼう
 - ①ゴムとび
 - ②音の出るマット
 - ③カラーラダー
 - ④輪投げ
5. 人間マット
6. 絵本読み

体育あそびは「できる」「できない」がはっきりしているため、年齢層の幅が気になったが、今回は、午前に大きめな子、午後に小さめな子が集中したので、活動に大きな差はなくスムーズに取り組めた。親子でできるかなあは、お猿さんになって親さんの身体を落ちないように前から後ろへ後ろから前と逆さになりながら移動したり、ペンギンさんといって親さんの足の甲の上に乗る歩くことをした。(図5)

地から足が離れる動作は、スリルが味わえる。ほかにトンボ・うまのりなどもおこなった。親さんが必死で子を守る姿は微笑ましかった。良いスキンシップができたかなあ。

今回は「跳ぶ」動作を中心に、高さの違うゴムひもを円上にセットした(図6)。最初は学生に手本を示してもらい年齢差があるのでどんな

跳び方をするのか観察をした。子どもは思いもよらない跳び方を考える遊びの王様である。一人がやれば真似をする子がいる。そこから次のあそびが展開する。跳ぶことは足を使いその刺激が脳に伝わり全体に流れていく、この速さが運動神経といわれるもので、この時期にとっても大切な運動である。運動の好き嫌いの分かれ道にならないよう参加者全員が活発に活動できるように内容を検討していきたい。



図5 親子でペンギンさん歩き



図6 ゴム跳びを楽しむ子どもたち

プログラムNo.⑤

活動名「べたべた、トントン、いい気持ち
絵の具で遊ぼう」

実施日・会場

平成19年9月22日(土) 保育実習室

午前の部 10:00~11:45

午後の部 13:00~15:15

ねらい

- ・絵の具のべたべた感を味わったり、手や足でも絵が描ける経験を楽しんだりする。

- ・手形、足形でできたデザインを楽しむ。

担当者 三羽佐和子

参加人数 111名 参加家族 41組

(保護者 47名/子ども 64名)

参加スタッフ 教員 5名 学生 32名

内容

<絵の具遊び>

遊び方を学生がよく知っていたこともあり、説明などでもそんなにまごつくことはなかったので、子どもたちも遊びのことをよく理解をし、すぐに取り組んだ。

絵の具遊びは自宅では汚れが気になってできない遊びなので、子どもたちも興味津々でとても喜んで参加していた。大人も結構喜んでいた。子どもの中には汚れを気にして、指先につけてする子もいた。

最初は遠慮がちにしていた子も、慣れてくるとだんだん積極的になり、足にもつけて紙のあちこちを歩き回り、できる足跡を見て満足していた。紙にきれいに色をつけるというより、自分自身の手の跡や足跡ができることを楽しんだり、手や足に絵の具がつく感触を楽しんだりする姿が殆どであった。

それぞれのグループで作品づくりがしたいと、下絵を描き準備していたが、午前の場合は人数が多かったことと、学生たちもどう指導してよいか分からないので、できれば余りよいとはいえなかったが、午後は人数がそんなに多くなくて、学生の説明も行き渡ったので、作品としてよいものとなった。

あそびの森の経験が2回目ということや、2年生でしっかりしなければという意識があり、学生は自分の仕事を的確に行っていたし、子どもや保護者への対応もよかった。

総括および考察

大きな混乱もなく比較的スムーズに流れたようで、前日までの準備をしっかりした結果と思う。何度も学生と打ち合わせやリハーサルを行った結果である。綿密な打ち合わせや準備は、会をスムーズに行うために今後も必要と思う。

午前午後で30・31組の予定、しかし実際には25組と16組という結果であった。前期も最後となり、忘れている人が多いのだろうと予想さ

れる。今年は残暑が厳しく、その影響もあるかもしれない。後半は受け入れの組数を多くしてもよいと思う。

親の中には、よい機会だからと子どもの手形足形を切り抜いて持って帰る人があった。最初からその用意をしておけば、よい記念になったと思う。今度行うときには用紙を用意しておきたいと思う。

午前より午後の方が落ち着いてできたし、海や山など、学生が用意した下絵に手形足形で色塗りをした絵もうまくできていた。午後は人数が少なく適当であったので、学生も指導がしやすかったのだと思う。もちろん学生が慣れてきたこともあるとは思いますが。

子どもたちがとても楽しんでいる姿から、本日のねらいはおおむね達成できたと思う。

今年の学生は2月にも前年度の2年生と一緒にいったことあって、様子がわかっており、スムーズにいったと思う。やはり、場数を踏むことが大切であると感じた。



図7 手や足で思い思いに絵を描く子どもたち

2 後期プログラム (10月～2月)

プログラムNo.⑥

活動名 「くまのプーさんを作って遊ぼう」

実施日・会場

平成19年10月20日(土) 保育実習室

午前の部 10:00～12:00

午後の部 13:30～15:15

ねらい

- ・日本の伝統文化である折り紙で西洋文化のキャラクターを作り、お面として遊ぶことが出来ることを学ぶ。
- ・手先を多く使うことで器用な子どもに成長する。
- ・親の手助けがないと完成しないことで触れ合いを多く持つことが出来る。

担当者 長谷部和子

参加人数 133名 参加家族 50組

(保護者 56名うち父親 5名 祖母 1名 / 子ども 78名)

参加スタッフ 教員 4名 学生 29名

内容

まず、手遊び(2種類)から始まり、子どもたちの注目を集め、折り紙に取り掛かった。今回は幼いときから子どもの指の動きを活発にするためには何が良いのかと考えていくうちに、日本の昔からある折り紙に取り組みで見たらよいのではないかという学生の提案から生まれた企画である。我がゼミでは例年必ず英語に親しむといったような催し物を行ってきたが、どうしても低年齢の参加者が多く、思ったような成果が得られないのが課題であった。

そこで、少しでも英語に関係があり、しかも折り紙と言うことで「くまのプーさん」を作り、そのお話を楽しみ、それにちなんだ英語の歌を親子で歌う内容となった。

お面として使うために、硬い紙を利用したことで、作り方はかなり難しくなった。一家族に必ず一人ないし二人の学生が指導と援助でつくこととした。そして、プーさんの目をパンチで開け、耳に輪ゴムをつけることでお面として使用した。

完成後はそのお面をつけて、学生手作りの紙芝居「プーさんの宝物」を読み、楽しんだ。

最後に「Under the Spreading Chestnut Trees、大きな栗の木の下で」の歌を英語と日本語で親子の振り付けつきで歌った。振り付けは難しい動きではないが、学生たちの親への援助は必要であった。

反省および考察

プーさんの顔を作成した後、目を開ける方法が適切でなく、時間を要したり、ホチキスで固定する方法を徹底指導しなかったのは次回の反省材料である。

全体として、2年生の親子との関わり方が昨年と比較して格段に上手くなっていると感じた。1年生が2年生の実践する姿を見て参考にし、同じように取り組もうとしたのはこのゼミの成果である。準備の段階で全員が熱心に取り組み、首尾良くことが運べたというのが率直な感想である。就職試験以外の学生全員が遅刻、欠席はしなかったのも嬉しいことであった。一部にプーさんの「折り方」を忘れていた学生がいて、多少出来上がりに不揃いが見られた。また、それぞれの子どもに学生が一人付くように指導したが、個人的に自分のものを作成していた学生が見られたのは残念である。



図8 お面を制作している様子

プログラムNo.⑦

活動名 「わらべうた遊びやゲームをして楽しもう」

実施日 平成19年12月1日(土) 保育実習室

午前の部 10:00~12:00

午後の部 13:30~15:15

ねらい

- ・リズムに合わせて、歌ったり踊ったり、鬼ごっこをしたりして、お母さんや友達と一緒に楽しく遊ぶ
- ・昔から伝わるわらべうた遊びの歌や歌詞、リズムなどに親しみを持つ

担当者 三羽佐和子

参加人数 120名 参加家族 43組

(保護者 48名/子ども 72名)

参加スタッフ 教員 5名/学生 29名

内容

<リズム遊び>

わらべうたは親たちも知っているようではあったが、うろ覚えらしくはっきりとはわからないようで、学生の説明に思い出しながらうなづく姿が見られた。

「ロンドン橋落ちた」は橋の所で捕まったら、こちょこちょとくすぐるというルールにしたので、くすぐられる子もその周囲にいた子たちもキャーキャーと大騒ぎであった。年齢の高い子たちは捕まらないようにすり抜けるようにして遊んでいた。

「なべなべそこぬけ」では親子2人組で行うとき、子どもが小さすぎてうまく回れないところもあったが、片方の手を外して回るという工夫をしていた。最後に全員で行ったが、うまく気持ちを合わせてひっくり返れた時、みんな歓声を挙げ、拍手が起こった。希望により再度行ったが、みんな気持ちが一つになったことが気持ちよかったようだ。

「あわぶくたつた」は全員では多すぎるので5組くらいのグループに分かれて行った。歌の部分では学生が鬼の役をしたが、捕まえる時には、親が自分の子どもを捕まえるというルールにした。そのため、全員が動いても危険がなく、親に抱きしめられた子どもは嬉しそうに、他の親子が追っかけているのを見ていた。学生も親と協力して子どもを追っかけた。中にはすばしっこく逃げる子がいて、なかなか捕まらず、学生と一緒に親はフーフー言いながら追っかけ、子どもは大喜びで逃げていた。

総括および考察

寒くなってきたせいかな午前の出席者が少なく、午後と10組近い差があった。午後は子どもが昼寝をするので、午前を希望する人が結構いるのにこの状態である。冬の朝は寒くて出にくいのだろうと考える。時間に遅れてくる親子が目立ち、慣れてきたせいかなとも思うが、遊びの始まりを20分ぐらい遅らせて行うようにした。し

かし、一方で、それならばと遅れることを平気に考える親もあると思うので、ある程度は時間に来るように伝えた方が良いのかなとも思う。

2人以上の子どもがいる親の所には学生を配置したり、最初から3人で行ったりするなど学生が臨機応変に対応していたのが印象的であった。これも、何回もの実習経験の成果かなとも思う。その2年生を見習ってか、1年生の学生も引込む姿は見られなかった。練習の成果でもあると思う。

「あわぶくたった」では親子で鬼ごっこをしたが、家庭では親子で鬼ごっこをすることが少ないようで、どの子も親に追っかけられたり、捕まえられたりするのを楽しんでいた様子だった。こういう機会に、親子でのふれあいを体験することは意味のあることと思う。

わらべうた遊びは、室内でもできるものがたくさんある。昨今親子で遊ぶことが少なくなっているのので、ぜひ、いろいろな遊びを紹介して、家庭でも親子で遊んでほしいと考える。



図9 グループで「あわぶくたった」を楽しむ様子

プログラムNo.⑧

活動名「クリスマス会」

実施日・会場

平成19年12月15日(土) 保育実習室

午前の部 10:00~12:00

午後の部 13:30~15:15

ねらい

- ・音楽や絵本、制作をとおしてクリスマスの雰囲気や冬の季節感を味わうことにより、想像力や感受性を高めること。

- ・季節の行事を楽しむ気持ちを親子で共有すると。

担当者 杉山喜美恵 生嶋亜樹子

参加人数 135名(保護者51名/子ども84名)

参加スタッフ 教員5名 学生26名

内容

- 1 クリスマスの歌をうたおう
- 2 サンタクロースの帽子をつくろう
- 3 クリスマス絵本(「まどからおくりもの」)

活動の導入では、学生によるクリスマスの歌の披露をして、クリスマス行事の雰囲気づくりを試みた。

活動の中心はサンタクロースの帽子づくりである。学生は計画段階より、どこまで制作の補助を準備段階で行ったほうがよいか、実際の帽子を試作しながら検討を重ねたが、帽子の土台となる形に切った赤い画用紙の「のりしろ」部分に、あらかじめ両面テープを貼ったものと、顔の形に切ったパーツを準備しておくこととなった。子どもの当日の活動は、帽子の形の画用紙を円錐形に丸めて接着し、表情を自由に描いた顔を貼ったあと、白い花紙を使ってサンタクロースの髪と髭を作る作業となる。

活動の支援のための事前準備を整えていたことで、子どもたちはスムーズに制作に取り組むことができた。花紙を使った髭の装飾は、とくに接着の作業が年齢によっては難しかったようで、学生や保護者の支援を受けながら取り組んでいた。子どもたちは思い思いにサンタクロースの表情を描き、完成した帽子をかぶって楽しむ様子が見られた。

活動のまとめとして、学生による絵本の読み聞かせを行い、サンタクロースとトナカイに扮した学生が登場してクリスマスにちなんだ会話を披露した。

また、会場に設置した大きなクリスマスツリーは、学生が製作したオーナメントで装飾した。オーナメントは、様々な大きさの空箱をラッピングしてクリスマスプレゼントに見たてたものであるが、当日は参加者した親子が、このオーナメントを手にとってクリスマスの雰囲気を楽しんでいる様子が見られた。

総括および考察

今回の活動においては、企画の段階で、制作のための準備をどこまでやっておいて、当日の子どもたちの作業の内容を何にするかを、学生がじっくり議論し検討する機会を得たことが成果のひとつであったといえる。すでに幼稚園や保育園での実習を終えた2年生は年齢による発達段階をつかんできており、企画段階より積極的に意見を出し、当日も適切な支援を行っていた。今後は、ひとつの作品を制作する際に、年齢別に事前の制作準備の段階を変えたプログラムを準備することを検討していきたい。年齢別の制作課題を設定することで、より多くの子どもたちが満足できるプログラムを提供でき、かつ学生にとっても、活動の見通しを立てて、プログラムの実施をとおしてそれを検証することのできる、有効な学びの機会となることが推察される。



図10 帽子づくりに取り組む様子

プログラムNo.⑨

活動名「粘土あそびのクッキー作り」

実施日・会場

平成20年1月26日(土) 集団給食室

午前の部 10:00~12:00

午後の部 13:30~15:15

ねらい

- ・親子で楽しい手作りおやつ作りを体験する。
- ・子どもや親の想像力を刺激する。
- ・食べ物を大切にする気持ちを養い、食に対する意識を高める。

担当者 若杉雅夫

参加人数 131名 参加家族44組

(保護者54名/子ども77人)

参加スタッフ 教員7名(幼教4名/食栄3名)

学生40名(幼児教育36名/東海学院大学4名)

内容

活動は前回同様、一卓のテーブルに一〜二組の家族がつき、クッキーの生地作り(白・茶・緑の三色)から始め、形作り、焼き上がり、試食までをフルコースで楽しむ内容とした。今回も、生地を粘土に見立て色々な自分だけのオリジナルクッキーを親子で協力してたくさん作った。親子共々夢中になって、オリジナルクッキー作りに没頭する姿には、毎回、学生と共に心が和まされる。形が完成したクッキーの焼き上げは、食物栄養学科の教員がフル回転で担当した。焼き上がるまでの待ち時間は15分〜20分ほどあったが、オリジナルクッキーへの期待感からか、健気に待つ子どもや一仕事終えた開放感から学生と鬼ごっこする子どもなど様々にその時を楽しんでいた。しかし、焼きあがると家族全員目がクッキーのトレーに釘付けとなり、出来栄に話が弾み会話が広がっていた。クッキーに舌鼓し、残りのクッキーを大切に包んで、参加者全員が笑顔で解散した。学生は、各テーブルに二人つき、クッキー作りの援助を行った。

総括および考察

平成17年度から取り入れた「粘土あそびのクッキー作り」は、今回で三回目の実施となる。毎回、食物栄養学科の協力を得、集団給食室を活動の場として開催している。プログラムの内容に変化はないが、他学科、ならびに地域食育センターと協力して取り組むという点では、大学全体にとって大いに意義が深い社会的貢献活動であると考えている。この観点から、子育て支援センター「あそびの森」として外せないプログラムとなっている。

参加者から見たプログラムの内容に関しても、131名参加と一月下旬のこの時期を考えると多く、また、リピーターが多い点から見ても魅力あるプログラムであると考えている。実施に当たっては、食品を扱うので万全の安全性と準備を整えておくことが必要不可欠である。

そのため、材料用具の準備、学生の支援・クッ

キー作りの方法などかなり綿密に計画し実行した。

活動の支援に関しては、各テーブルに2年生と1年生が1名ずつ付き協力して行った。短期大学では、ともすれば希薄となる先輩と後輩のつながりに関しても一定の効果を生んだと考えている。

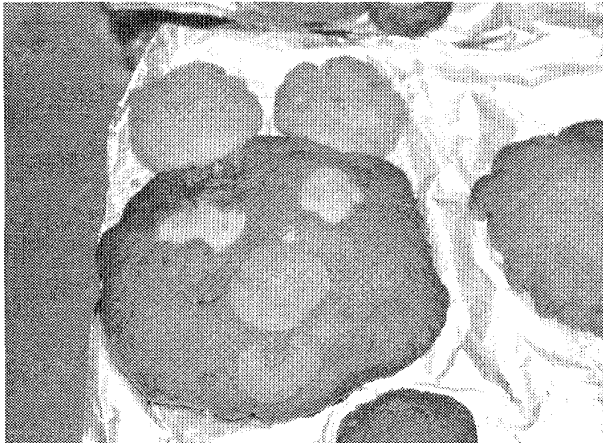


図 11 オリジナルクッキーの出来上がり

プログラムNo.⑩

活動名 子ども：「みんなで歌ったり踊ったりしよう」

保護者：「子育て懇話会」

実施日・会場

平成 20 年 2 月 16 日（土）保育実習室

午前の部 10：00～12：00

午後の部 13：30～15：15

ねらい

子ども・保護者とはなれて遊ぶ体験をする
 ・ちいさなブロックを皆で積み重ね大きな山を作ることを通して達成感を味わう

・パネルシアターのお話を聞きファンタスティックなイメージを味わう

保護者・わいわい育児を語ることによって、自分の子育ての気付きとする

・日頃の育児ストレスを発散する

参加人数 77 名 参加家族 25 組

（保護者 30 名／子ども 47 名）

担当者 篠田美里

参加スタッフ 教員 7 名（懇話会 4 名 遊び 3 名）

学生 37 名

内 容

- | | |
|--------------|---|
| 1 手遊び | ・こぶたぬきつねこ |
| 2 リズム遊び | ・ぼきぼきおどり |
| 3 保護者
子ども | ・子育て懇話会
・お山を作ろう
・森の動物に変身
・お山のまわりで踊ろう
・保護者と一緒に歌いましょう |
| 4 パネルシアター | ・ふしぎなたまご |

総括および考察

この活動は、担当教員が提示したテーマ“山の音楽家ごっこ”を、2年生が内容（遊び）を出し合い、プログラムを構成し、1年生と共に当日の進行を担当したものである。

今回は 90 分のうち 50 分を保護者と子どもが別々の部屋ですごすため、子どもたちの気持ちを惹きつけるプログラム立案に苦勞した。子ども一人に一名の学生の担当を決め、子どもの信頼を得られるよう、入室直後から少しずつ関わる形で進めて行った。どの子どもお姉さんと一緒に遊びに参加してくれることが最大の願いではあるが、話し合った結果「できるだけ子どもの気持ちに沿うこと」を第一にしようと決めた。「事前に保護者がいる部屋を子どもに見せる」「保護者と離れられない子どもは保護者のいる懇話会の部屋で遊ぶ」「寂しくなった子どもは学生と一緒に保護者の様子を確認しに行く」等と、出入りを自由にし、子どもが不安にならないことを心がけた。これらの体験は、就職後、講演会などの預かり保育や、子育て支援時などに生かせる実践的な体験となったと考える。

お山作りでは、土台部分に踏み台を使い、子どもが出来るだけ上のほうまで上れるよう工夫した。牛乳パックに新聞紙を詰める作業は1年生が中心となり準備を進めた。新聞紙の詰め方によって強度が異なるため、詰め方にも工夫が要った。お山作りは、こちらの想像以上に子どもたちが夢中になった活動であった。用意した牛乳パックをすべて積みきり、達成感の中で森の動物に変身して、歌って踊った。子どもたちの見立てる想像力の豊かさに接し、学生はより感動したようだった。今回も「身近にある材料

を使って、普段家では出来ない遊びにしよう」という理念の下、学生が考えた遊びが子どもに受け入れられ、とても達成感のある楽しい時間を共有できた。「あそびの森」を通した、親と子、学生の心の育ちの相乗効果を感じた。

保護者は子どもと離れて隣の部屋で日頃の育児を語り合った。心理カウンセラーと保育の現場経験者という専門家がファシリテーターとなり4～5人のグループで育児をわいわい話し合った。この企画は年間2回プログラムの中に入れている。大きな問題が出されることはないが日々のさりげない問題を語ることで、自分自身が問題に気付いたり、解決案に気付いたりする。また、他の人の育児の様子を知ることが出来るチャンスでもある。

育児懇話会の様子や、内容、問題点については、下記の「子育て懇話会」に記載している。

いずれにしても、プライバシーが守られ、安心して日頃の育児状況を話すことが出来ることは気持の開放につながる。この様な場所を今後増やしていく必要性を感じた。

プログラムNo.③⑩

活動名 「子育て懇話会」

実施日 平成19年7月7日(土)

平成20年2月16日(土) 保育実習室

午前の部 10:30～11:30

午後の部 14:00～15:00

ねらい

- ・子育てについてさまざまな人たちと話し合い、今後の育児の参考とする
- ・自分の子育ての喜びや悩みを話し、気持ちの発散をする

担当者 高橋明子 後藤佐智子 瀬地山葉矢
田中ヒロ江 神谷かつ江
三羽佐和子

参加人数 7月/35名 2月/22名

内容

<話し合いの記録>

○ 子どものこだわりが強く、服は何枚あっても好きなものしか着ない。買い物に行った時、これが欲しいと言い出したら買うまでおやんちやを言って聞かない。また、友達の家に行

びに行って、5時だから帰ると言う毎日ひっくり返って泣き叫ぶ。子どもの言うことを聞いてあげるのがよいのか、どうしたらよいか迷う。

今まで聞いてきたので、急に変えることは難しいと思うが、母親だけではなく、父親や友達の母親の協力も得て、気持ちを他へ向けたり、違った服を着たときにみんなが「かわいいよ」といってあげたり、どうしてだめなのかをしっかりと話したりすることが必要。母親がどうしたいのかを考えをもって努力をすることも大切。

○ 3歳児になるとみんな幼稚園に行くが、もう少し家で自分が見てやりたい。友達ができないからだめなのか。近くの児童館へよく行って友達とは遊んでいる。

3歳だから幼稚園へ行くというように、年齢で考えるのでない。人とかかわる基本はお母さんとの信頼関係がきちんとできていることが大切なので、3歳だからと行かなければならないことはない。15年前位までは2年保育が普通だった。家庭によって、子どもによって、違ってよいのではないか。

○ 近所の友達がみんなよく一緒に遊べるが、一人の子だけ側に来ると押すので危ない。

何か訳があるのかもしれないが、言ってもまだ理解できないので、親が気をつけて見守るのが一番。手を出しそうになるのはどんなときなのか、また、怪我をしないようにとめに入ることはした方がよい。

○ お父さんは子育てにどんなことをしてくれるのか。

・子どもが大好きで、トイレに連れて行ったり、公園に連れて行ったりしてくれる。

・お父さんの休みが平日なので、今は2歳だからよく遊んでくれるが、幼稚園へ行くようになると一緒に遊ぶことができないのではないかと心配している。

・出かけるときや、遊びに行くときに、自分のことだけさっさとやって、子どものことは何も手伝ってくれない。荷物も持たないし、お母さんの準備が遅いと怒る。

総括および考察

毎回、最初は何となく堅い雰囲気であるが、アドバイザーが保育現場や心理学などの先生たちなので、うまくリードしてくれ、直に本音でいろいろな話をしてくれた。新米ママの悩みに、ベテランママが自分の経験を話す姿が多く見られ、和気藹々で話が進んでいた。

とてもよい顔で帰られたり、わざわざ気持ちがあすっきりしたと話していかれる人がいたりして、良い会であったと思う。今の子育ての事情を考えると、昔の井戸端会議のように、気軽に話せる場があることが大切である。今後も年2回はこのような会を持ち続けることが必要であると思う。

毎回、父親が2～3人参加している。うれしいことであるが、もっと増えてくるように働きかけることが必要と思う。



図12 子育てについて語り合う保護者

3 その他のプログラム

その他のプログラム①

活動名 「岐阜東・大洞幼稚園交流」

実施日 平成20年2月26日(火)

10:00～13:30

ねらい

- ・岐阜東・大洞幼稚園の5歳児が「あそびの森の部屋」で楽しく交流ができる
- ・野菜をよく見ながら、筆や木のペン、墨を使って、絵を描くことを楽しむ

担当者 若杉雅夫

参加人数 46名(子ども42名/保育者4名)

参加スタッフ 教員4名/学生5名

内 容

くうた・リズム遊び

子どもたちは日頃の園生活と全く異なった環境だったので、最初は緊張している様子だったが、すぐに慣れてロフトや大型滑り台など、目新しい遊具に大喜びで、はしゃいでいた。

両園の子どもたちが知っている歌を2曲歌う。違う園の同じ年齢の子どもが一緒になって歌う経験が新鮮なようで、どの子どもが大きな口を開けて、楽しそうに歌っていた。

わらべ唄遊びを行った。最初は「花いちもんめ」を行ったが、知らない友達の名前を教え合いながら喜んで行っていた。じゃんけんで勝った方はワーイと歓声をあげ、負けた方はフーと残念そうな声を上げていた。勝ったり負けたりしながら、両方の園児が一体感を味わっているようだった。

「なべなべそこぬけ」では、2人組ですることは園でも良くやっているようで、殆どの子ども達もスムーズに行うことができた。4～5人のグループになると、戸惑うグループも見られたが、教員と学生の援助でクリアできた。全員でも行ったが、学生がリードして、うまくひっくり返ることができ、歓声があがり、拍手が起こった。

墨絵は子どもたちにとって初めての経験ではあったが、楽しんで描いていた。野菜の特徴を子どもなりに捉えて、おとなでは真似できない感性の作品ができあがった。落款を押すのも初めてで、子どもたちは名前のひらがなを捜して押すことをとても喜んでいた。

寒い時期ではあったが、室内は暖房が効いて快適。昼食は三々五々に敷物を敷いて、保護者手作りのお弁当に舌鼓をうっていた。よく遊び子どもも満足げで、和やかな雰囲気が流れていた。

総括および考察

両園とも5歳児1クラスであり、人数が少なくいつもはこじんまりした遊びになるが、一緒になったことで、42人という大人数になり、競争心も湧いて、かなり意欲的な姿が見られた。このような場が提供できたことは子どもの成長

の手助けになりうれしいことである。学生にとってもよい学びの機会ともなった。今後もこのような場の提供を行いたい。

両園の4名の教師、大学の教員4名、学生5名とおとなが13名いることによって支援体制がしっかりできた。日頃大勢の子ども対教師が一人という体制の中で、十分に関わってもらうことができないこともある。今日は一人一人の子どもが思いを受け止めてもらえ、どの子どもが満足していたように感じた。

絵画の専門家(若杉先生)の指導のもとで墨絵を描くということは、幼稚園ではなかなか機会がない。いつもとは違った指導と、一人一人に丁寧に付き合う学生がつくことで、子どもたちも取り組みやすかったようだ。日常とは違った中での絵画指導は子どもにとっても良い刺激となった。昨年も行ったが、園によっては作品をはって屏風のようにしたという。今年はどうのようにしてこれらの作品を飾ってもらえるか楽しみである。



図13 野菜を観察して墨絵で描いている様子

その他のプログラム②

活動名「あそびの森で遊びましょ」

実施日・会場

平成19年10月20日(土)

JR岐阜駅ハートフルスクエアG

10:00~12:00

ねらい

- ・ペープサート劇を親子で楽しむ
- ・親子であそび 楽しさを共有する
- ・人間関係の広がりを培う

担当者

若杉雅夫 三羽佐和子 篠田美里

参加人数 57名(保護者27名/子ども30名)

参加スタッフ 教員3名/学生37名

内容

- 1 手遊び「おおきい小さい」
- 2 ペープサート「ながいながいへびのおはなし」
- 3 リズム遊び ・ぼきぼきおどり
・おもちゃのちゃちゃちゃ
- 4 音探検 ・ぶーぶー笛・ばしゃばしゃ池
- 5 感触あそび・小麦粉粘土

総括および考察

この活動は、岐阜市女性センター主催の「次世代支援事業・ハッピーデー」に依頼を受け、出張公演したものである。昨年に続いて2度目の訪問である。

岐阜駅という利便さと二日間に渡る「次世代支援事業」という子育てのイベントのため、特に募集や、受付をするのではなく、広報の案内とチラシの配布のみである。この場合、子どもの年齢や参加人数がわからないことを覚悟してプログラムを作らなくてはならない。このような形での開催体験は今後学生が様々な場所で活動していくことを考えると貴重な場となるといえる。初めて出会った親子と短時間でコミュニケーションをとり、楽しく遊び、満足して帰路についていただく難しさはこういった現場でしか体験できないことである。

一方で、子ども自身も保育所などの集団の場と保護者同伴の場とでは反応が異なる。「なぜそうなるのか？」子ども側の気持ちになって考えるよいチャンスである。さらに、様々な親子の関わり方を目にし、学ぶことも多いと考える。出張の場合は、多くの荷物の移動が大変であるが、それ以上に親子の関わりを学ぶ貴重な機会となるといえよう。

その他のプログラム③

活動名「ペープサートを観る会」

実施日・会場

平成19年7月21日(金)

平成19年11月2日(金)

平成19年12月7日（金）

平成20年1月18日（金）

平成20年2月13日（水）

依頼先の保育園・幼稚園

10：00～11：30

担 当 若杉雅夫・篠田美里

ね ら い

- ・ペープサート劇を楽しむ
- ・おねえさんとあそび 楽しさを共有する

参加人数 約470名（5ヶ所）

保育者約 40名子ども約400名

保護者等約 30名

参加スタッフ 教員2名／学生26名

内 容

- 1 手遊び
- 2 ペープサート
- 3 リズム遊び
- 4 マリンバ演奏
- 5 大型絵本

総括および考察

「ペープサート劇を観る会」は、学生が「保育実践活動」で製作した「ペープサート劇」（年12作品製作）を広く地域の子どもたちに提供したいという理念で企画したものである。本来はあそびの森に出向いてもらい、観賞と「あそびの森」で遊ぶことを主眼としたが、実際始めてみると、園バスの乗車可能人数による人数制限や、給食の時間までに園に戻る必要があるため、時間も限られることなどの理由から、出張依頼が相次いだ。そこで「保育内容研究ボランティア活動」の時間と連携して、出張公演をすることにした。「保育内容研究ボランティア活動」ではすでに平成15年度から図書館や保育園、幼稚園、コミュニティーセンター、児童館などで活動をつづけているので、新たに訪問先が増えることとなった。

今年度は5園で約470人の方々とコミュニケーションすることが出来た。この人数の多さに驚くと共に出張公演の必要性を感じた。そこで、今年度からは「保育内容ボランティア活動」としての「ペープサート劇を観る会」も子育て支援「あそびの森」活動の報告に加えることとした。「保育内容ボランティア活動」が金曜日の午

前中に設定されているため、「ペープサートを観る会」はこの時間に限定される。そのため今年度は「幼稚園及び保育所」という場所に限られていたが、今後は地域の親子にもこの機会を提供していきたいと考える。

その他のプログラム④

活 動 名 「児童センターとの連携プログラム」

参 加 者 長良児童センター
ポロちゃんクラブ

実 施 日・会 場

平成19年6月20日（水）保育実習室

担 当 者 長良児童センター職員

杉山喜美恵・生寫亜樹子

参加組数 25組

参加スタッフ 教員2名／学生36名

内 容

- 1 はじめのあいさつ、体操
(児童センター職員)
- 2 あいさつ、ふれあいあそび
- 3 グループあそび
- 4 おわりのあいさつ、体操
(児童センター職員)

総括および考察

長良児童センター1歳児を持つ親子の会であるポロちゃんクラブの活動の一つのプログラムとして、参加者に「あそびの森」へきていただいた。これは、地域子育て支援の拠点の一つである児童センターと協力して行うという新しい試みである。

内容は、0歳児ということで、一斉活動でなく、個別にかかわることを重視し、グループ別活動とした。学生たちが保育ゼミナールの授業のとして、グループ別に内容を企画し実践した。

その他のプログラム⑤

活 動 名 「子育てサークルとの連携プログラム」

参 加 者 長森子育てグループ「ミッフィクラブ」

実 施 日・会 場

平成19年7月18日（水）保育実習室

10：00～11：30

担当者 杉山喜美恵 生嶋亜樹子

参加組数 31組

参加スタッフ 教員2名/学生36名

内 容

- 1 はじめのあいさつ
- 2 ふれあいあそび (たけのこくん)
- 3 大型紙芝居『みんなでぼん!』
- 4 簡単な工作 (笛、いないいないばあ)
- 5 自由あそび
- 6 おわりのあいさつ

総括および考察

子育て自主サークルとの連携を試みた。参加者は、日ごろ、サークルとしてさまざまな活動を行っている所以他们の活動とは異なったものにしたと考えた。そこで、担当制とし、工作を取り入れてみた。

終了後の感想では、親子1組に学生がつくことにより、安心してあそばせることができ、日ごろとは異なった子どもの表情を見ることができた。また、あそびのヒントも得ることができたという意見が多くみられた。ただ、担当学生のかかわり方によって、満足度に差がでるということが問題としてあがっていた。

その他のプログラム⑥

活動名 「おねえさんといっしょにあそぼう」

参加者 ながら「親子ふれあい教室」参加者

実施日・会場

平成19年10月24日(水) 10:30~12:00
長良公民館 (岐阜市)

担当者 ながら「親子ふれあい教室」担当者
杉山 喜美恵/ゼミ学生

参加組数 39組

参加スタッフ 教員1名/学生34名

内 容

- 1 はじめのあいさつ、体操
(ながら「親子ふれあい教室」担当者)
- 2 あいさつ、ディズニー体操
- 3 グループあそび
- 4 おわりのあいさつ
- 5 閉会のあいさつ、体操
(ながら「親子ふれあい教室」担当者)

総括および考察

毎年、活動プログラムの一つを任せていただいているが、今年度から出張「あそびの森」として位置づけられた。出張の場合、交通手段の確保が問題となるが、今年度は学校側の配慮でバスを手配してもらえたため授業効率が格段にあがった。

その他のプログラム⑦

活動名 「児童センタープログラムへの参加」

参加者 長良児童センター

「ポロちゃんクラブ」

実施日 5月~12月のうち全15回

総括および考察

長良児童センターが開催している1歳児親子むけ活動に毎回学生が3、4名ずつ参加させていただき、地域子育て支援における児童厚生施設の役割を学ばせていただいている。

日程と参加人数は表1に示すとおり。時間は10:00~12:00である。内容は主に手あそび、絵本読み、活動補助である。

実習および学事の関係で参加できない日にもあり、また、ゼミ学生の人数によって毎回異なった学生が参加するため、施設側の理解が必要である。また、交通手段等の問題もあがってくる。したがって、施設側と養成校側双方の理解と連携が大切となる。

以上4つのプログラムより、短期大学部としてどのように地域子育て支援にかかわっていくか、また、学生の効果的な学びを得るために、そこでの活動においてどのような内容、方法を考えていくとよいかについて多くの示唆を得ることができた。

表1 プログラムの日程と参加人数

	日 程	参加人数
前 期	5月9日(水)	5
	5月16日(水)	6
	5月23日(水)	5
	6月27日(水)	5
	7月4日(水)	5
	7月11日(水)	4
	7月18日(水)	5
後 期	10月4日(水)	4
	10月10日(水)	4
	10月17日(水)	4
	11月7日(水)	4
	11月14日(水)	4
	11月21日(水)	4
	11月28日(水)	4
	12月5日(水)	4

Ⅲ 実践の総括

1 「あそびの森」の理念と実践の拡充

児童教育学科幼児教育専攻において、平成16年度より取り組んできた「あそびの森」も、本年度で4年を経過した。参加人数は、1年目約500名、2年目約900名、3年目約1100名、そして4年目である本年は約1200名と、年々増加してきている。また、本年度の毎月のプログラムへの参加者(実数)のうち多いのは、岐阜市(84組)、各務原市(54組)からの参加者であることから、近隣の幼稚園や保育園への案内の配布などを中心とした、本学の立地を生かした地域へのアピールが次第に認知されてきたと考えられる。また同時に、羽島市(11組)、尾張旭市・瑞穂市・可児市(各1組)など本学から比較的遠い地域からの参加もあり、よりよい子育て支援のプログラムを開発することで、より広い地域の参加者へ本学の実践を知ってもらえる契機になると思われる。

特に本年度の実践の特徴としての「あそびの森」の活動の拡充に関しては、活動報告の「その他のプログラム」でとりあげたように、市内の幼稚園との交流(あそびの森を体験してもら

う企画と出張企画の両方)、市主催の子育て支援事業での公演、児童センターや子育てサークルとの連携プログラム、児童センタープログラムへの参加と、多岐にわたっている。このことは、平成19年度より「あそびの森」がそれまでの保育実習室としての機能をさらに拡充させて、本学において子育て支援センターとして位置づけられたことによるところが大きく、様々な形で地域と連携するための条件が整いつつあるといえる。

また、本年度は、年度当初に専攻スタッフ全員で、「あそびの森」の毎月のプログラム以外に、ゼミ単位で子育て支援にかかわる活動を行ってきたのかを検討し、各々が、核となる「あそびの森」のプログラムにどのように位置づけるのか検討する場をもった。そこで明らかになったことは、現在、子育て支援は、実践、ニーズともにますます拡大しそして多様化してきていること、そのため養成校として学生の学びの場を広く捉えるとともに、そのような学びの場を生かし、地域と連携を深めていく必要があるという点である。子育て支援をより広く捉え、「あそびの森」の機能を拡大させていくという認識においてスタッフ全員の意識の一致をみたことで、平成19年度は特に、各教員の専門性を生かした、ゼミにおける活動を拡充させることができた。そのことはまた、学生の学びの質や意欲を高めることにつながり、「あそびの森」の月例プログラムをはじめ、全体としての実践の向上の契機になったといえる。

2 「あそびの森」と学生の学びのひろがり

このように、「あそびの森」の理念と実践が拡充したことで、本年度において学生の学びはどのようにひろがっていったのだろうか。各プログラムにおける考察を総括することで分析してみる。

第1に、親子への遊びの支援の能力が向上したことがあげられる。プログラムNo.①「新聞紙であそぶ」では、当初予定していた活動をすべて実施することに優先して、途中段階の遊びの盛り上がりを大切にしてプログラムを収束させ

るという選択をしている。このことにより学生は「プログラムの計画にとらわれることなく、参加者の心を読み取りながら状況に応じて、遊びの展開に柔軟性を持たせることの重要性」(p.106)を学んだことが指摘されているが、「あそびの森」での実践の場を重ねてきたからこそできる学びであり、実習の場や就職後に必要となる臨機応変な対応を実際の親子の様子から学ぶ、貴重な機会となっていることが指摘できる。また、その他のプログラム②「あそびの森であそびましょ」は、広報の案内による参加者を対象としたプログラムで、子どもの年齢や参加人数がわからない状況での企画運営である。このようなプログラムからは、「初めて出会った親子と短時間でコミュニケーションをとり、楽しく遊び、満足して帰路についていただく難しさ」(p.118)を学ぶ貴重な機会であることが指摘された。

第2に、実際の子どもを対象にしたプログラムを開発する能力の向上である。プログラムNo.②「おとであそぼう」では生活用品を活用した手作りの楽器づくりが学生主体で企画され、ここでは、材料の調達など「見通しを立てて進めていかなければならない活動」(p.107)をプログラムの実施日までに目標を立てて進めていくことから得る学びのよさが指摘されている。このような学びは、通常の講義や演習で習得したことを実際に生かす重要な機会だといえる。

第3に、ゼミのシステムを生かした学年間の連携である。プログラムNo.⑥「くまのプーさんをつくってあそぼう」では、「1年生が2年生の実践する姿を見て参考にし、同じように取り組もうとしたこと」(p.111)をゼミの成果として指摘している。プログラムNo.⑦「わらべうた遊びやゲームをして楽しもう」では、「2年生を見習ってか、1年生の学生も引込む姿は見られなかった」(p.112)ことが指摘されている。上記のプログラム⑥⑦は後期プログラムであり、1年生はゼミに所属したばかりで、実習に行く前の段階である。この時期に、すでに実習を終えた2年生が親子とかかわる姿を目にすることで、これからの学びの目標設定や、めざす保育者のイメージを明確にすることができ、学習意

欲の向上につながることを推察される。

3 おわりに

このように、平成19年度の「あそびの森」の実践では、本学における子育て支援センターという機能の拡充もあり、専攻スタッフが「あそびの森」の理念への共通理解を深め、学生の学びの重要な場であることを認識したうえで実践を重ねることができた。また、「あそびの森」の活動をとおして、地域の方々に大学がどのような活動を行っているかを具体的に広報する機会となり、多くの方に「あそびの森」に足を運んでいただいたことが、より実践の質を高める契機となってきたといえる。

最後に「あそびの森」の運営に関わっていただけで多くの方の協力を感謝いたします。

— 児童教育学科 幼児教育専攻 —

〈平成19年度「あそびの森」運営の記録〉

◇運営

若杉 雅夫 三羽佐和子 松尾 良克
伊藤 功子 長谷部和子 篠田 美里
杉山喜美恵 生島亜樹子

◇事務担当

三羽佐和子 生島亜樹子

◇全プログラムの 親子名札作成 松尾 良克

◇出席カード制作および室内装飾 若杉ゼミ生

〈執筆分担〉

若杉 雅夫 プログラムNo.① ⑨
三羽佐和子 プログラムNo.⑤ ⑦ / No.③ ⑩
(懇話会)その他のプログラム①
伊藤 功子 プログラムNo.④
長谷部和子 プログラムNo.⑥
篠田 美里 プログラムNo.② ⑩
その他のプログラム② ③
杉山喜美恵 プログラムNo.③
その他のプログラム④ ⑤ ⑥ ⑦
生島亜樹子 プログラムNo.⑧
I 実践の概容 III 実践の総括

表2 平成19年度「あそびの森」プログラム

No.	開催日	プログラム	あそびの内容
①	5月26日	新聞紙で遊ぼう	新聞紙を破ったりちぎったりして、気持ちを思いっきり発散しよう。破ったりちぎったりした紙切れからいろいろな形を連想し、造形遊びも楽しめます。
②	6月30日	音で遊ぼう	不思議な棒を作ります。それを持って音の出る物を探してみましよう。どんな音が聞こえるかな？みんなで音を出したり、歌ったりしましょう。
③	7月7日	子：七夕飾りを作ろう ／親：子育て懇話会	七夕飾りを作ってみみんなで七夕を楽しみましょう。おりひめさんとひこぼしさんが会えるといいね。 保護者の方は子育てについて意見を交わしましょう。専門の先生も話の仲間入りをします。
④	8月25日	親子であそぼう 「できるかなあ？」	「親子で巧みな動作にチャレンジしよう！」をします。親子で遊ぶ機会を多く持ちたいものです。参考にしてください。親子とも動きやすい服装で来ててください。
⑤	9月22日	「べたべた、トントン いい気持ち」 絵の具で遊ぼう	大きい紙に手形や足形をつけて遊んだり、手や筆を使って線や丸や好きな絵をいっぱい描いたりして楽しく遊ぼう。親子とも汚れてもよい服装で来てね。
⑥	10月20日	「くまのプーさん」 を作っであそぼう	大きなプーさんを描いたり、折り紙でプーさんやピグレットを折ったりします。どんぐりを使ってプーさんの「でんでん太鼓」も作ってみましよう。
⑦	12月1日	わらべうた遊びや ゲームをして楽しもう	昔から伝わるわらべうた遊び。最近は遊ぶことが少なくなりました。でも、この遊びは子どもの心を育てます。親子でいろいろな遊びを楽しみましょう。
⑧	12月15日	クリスマス会	歌、ゲーム、お話など、おねえさんと一緒に一足早いクリスマスを楽しんでみませんか。
⑨	1月26日	粘土遊びの クッキー作り	クッキーの生地を粘土に見たてて、いろいろな形を作ってお菓子作りを楽しみます。自分だけのオリジナルクッキーが出来るよ。
⑩	2月16日	子：みんなで歌ったり 踊ったりしよう ／親：子育て懇話会	子どもたちは「山の音楽家」に変身して、みんなで歌いましょう、おどりましょう。パネルシアターも見ますよ。 保護者の方は子育てについて、専門の先生を交えて楽しく語り合いましよう。
	11月30日 12月7日	ペープサートを観る会	幼稚園・保育所団体別鑑賞会（団体のみ）

表3 平成19年度「あそびの森」参加者数

No.	開催日(プログラム)	参加者数				
		組	子ども	親(母・父・他)	園・施設	合計
【月例プログラム】						
①	5/26(新聞紙で遊ぼう)	44	68	49(45・4・0)		117
②	6/30(音で遊ぼう)	52	81	64(51・11・2)		145
③	7/7(七夕飾りを作ろう/懇話会)	38	59	44(36・5・3)		103
④	8/25(親子であそぼう)	40	64	47(40・6・1)		111
⑤	9/22(絵の具で遊ぼう)	41	64	47(40・5・2)		111
⑥	10/20(くまのプーさんを作って遊ぼう)	50	78	56(50・5・1)		134
⑦	12/1(わらべうた遊びやゲーム)	43	72	48(41・5・2)		120
⑧	12/15(クリスマス会)	46	84	51(45・5・1)		135
⑨	1/26(粘土遊びのクッキー作り)	45	77	54(44・9・1)		131
⑩	2/16(歌ったり踊ったり/懇話会)	25	47	30(24・6・0)		77
合計		424	694	490		1184
【その他のプログラム】						
①	2/26(岐阜東・大洞幼稚園交流)		42		4	46
②	10/20(あそびの森で遊びましょ)		30	27		57
③	11/2 他全5回(ペープサートを観る会)		400	40	30	470
④	6/20(児童センターとの連携)	25	25	25		50
⑤	7/18(子育てサークルとの連携)	31	31	31		62
⑥	10/24(おねえさんとあそぼう)	39	39	39		78
⑦	5/9 他全15回(児童センターへの参加)	20	のべ260	のべ260		520
合計		115	827	422	34	1283

平成19年度「あそびの森」参加者数 子ども1261名/保護者652名(519組)/園・施設職員34名

総合計2467名